教科書との対応

光村図書 中2『国語2』p.158～162「漢詩の風景」

次の漢詩（訓読文・白文・書き下し文）と、現代語訳・解説を読んで、あとの問いに答えなさい。

絶句　　杜甫

江碧（ニシテ）鳥逾（イヨイヨ）白（ク）
山青（クシテ）花欲（スレ）然（エント）
今春看（ミス）又過（グ）
何（レノ）日（カ）是（レ）帰年（ナラン）

（白文）江碧鳥逾白　山青花欲然　今春看又過　何日是帰年

（書き下し文）絶句
江碧（こうみどり）にして鳥逾（いよいよ）白く
［　X　］
今春看（みすみす）又過ぐ
何（いず）れの日か是れ帰年（きねん）ならん

（注）江＝大きな川。碧＝深い青緑色。然えん＝燃えるように赤くなろう（「然」は「燃」と同じ）。看す＝見る見るうちに。帰年＝故郷に帰る年。

【現代語訳】

川の水は深い青緑色にすみ、そこに浮かぶ鳥の白さが［　a　］きわだって見える。山は青々としげり、花は燃え出しそうなほど赤くさいている。今年の春も、［　b　］過ぎ去っていこうとしている。［　c　］、故郷に帰れる年が来るのだろうか。

【解説】

作者の杜甫（とほ）（七一二～七七〇）は、唐の時代の詩人で、「詩聖」とよばれる。戦乱をさけて各地を移り住み、晩年は故郷を遠く離れた蜀（しょく）（今の四川省）の成都などで暮らした。この詩は、そのころの作とされている。「絶句」という題は、詩の形式の名をそのまま題にしたものである。

前半の二句は、目の前の春の景色である。川の水の青緑と鳥の白、山の青と花の赤。四つの色が、二つの句の同じ位置に向かい合うように置かれていて、まるで一枚の絵のように明るくあざやかだ。とくに第一句は、川の水が濃い青緑だからこそ、鳥の白さがいっそう引き立つ、という色の取り合わせのおもしろさをとらえている。

ところが、第三句で詩の調子は一変する。今年の春も、見ているうちにまた過ぎていく。そして第四句で、作者は、いつになったら故郷に帰れるのかとなげく。前半の景色が明るく美しいほど、1後半の作者の思いは、いっそう切なくひびく。

春は毎年めぐってくる。しかし、それは同時に、故郷に帰れないまま一年がまた過ぎたことを、作者に思い知らせるものでもあった。美しい春の景色をうたいながら、2故郷を思う作者の悲しみを浮かび上がらせているのである。

この詩の組み立てを起承転結で見ると、起句で川と鳥、承句で山と花をえがいて春の景色をうたい起こし、転句で「今春」「又過ぐ」と時の流れへ目を転じ、結句で故郷への思いをのべて全体をしめくくっている。景色（情景）から心（心情）へと移る、絶句の典型的な組み立てである。

（漢詩は杜甫「絶句」　注・現代語訳・解説は創心館オリジナル）

問一 この詩の形式を、漢字四字で答えなさい。

問二 この詩で押韻している字を、訓読文から二つ抜き出し、句の順に書きなさい。

問三 書き下し文の［ X ］に入る第二句を、訓読文の返り点と送り仮名にしたがって、書き下し文に直しなさい。

問四 第二句「山青花欲然」を、返り点にしたがって読む順番に、漢字を書き並べなさい。

問五 第一句と第二句は対句になっている。第一句の「江」「白」と同じ位置にあって対応する字を、第二句の白文からそれぞれ一字で抜き出しなさい。

江

白

問六 【現代語訳】の［a］～［c］に入ることばとして最も適切なものを、次からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア ますます　イ ようやく　ウ 見る見るうちに
エ ゆっくりと　オ いつになったら　カ 来年こそは

a

b

c

問七 第二句の「花然えんと欲す」は、花のどのような様子を表しているか。最も適切なものを、次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 花が、燃え出しそうなほど赤くさいている様子。
イ 花が、火事で焼けてしまいそうになっている様子。
ウ 花が、しおれてかれかけている様子。
エ 花が、まだつぼみのままでさいていない様子。

問八 1後半の作者の思いは、いっそう切なくひびくとあるが、それはなぜか。最も適切なものを、次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 明るく美しい春の景色と、故郷に帰れない悲しみとが、対照的にえがかれているから。
イ 春の景色がだんだん暗くなり、作者の不安が強まっていくから。
ウ 故郷の春の景色を思い出し、帰る日を楽しみに待っているから。
エ 四つの色をならべて、作者の楽しい気持ちを表しているから。

問九 2故郷を思う作者の悲しみとあるが、作者は、春が来ることを、どのようなものとして受け止めているか。「故郷」「一年」という二つのことばを使って、三十字以上、四十字以内で書きなさい。

問十 解説の筆者は、前半の二句の景色を、何のようだと述べているか。解説から四字で抜き出しなさい。

解答と解説

漢詩 標準④ 絶句（杜甫）

絶句

問一 五言絶句

【根拠】詩は四句。どの句も「江碧鳥逾白」のように五字。

【読み方の型】四句＝絶句・八句＝律詩、一句五字＝五言・七字＝七言。白文の漢字で数える。題が「絶句」でも、字の数（五言）まで確かめて四字で答える。

【よくある間違い】「絶句」だけ……漢字四字で答える。題の「絶句」は形式の名。／「七言絶句」……送り仮名（イヨイヨなど）を数えない。一句の漢字は五字。

問二 然・年

【根拠】第二句の終わり「然（ゼン）」と第四句の終わり「年（ネン）」。

【読み方の型】五言の詩は偶数句の終わりで韻をふむのが基本。偶数句の最後の字を音読みし、「〜ン」のひびきがそろうことを確かめる。

【よくある間違い】第一句の「白（ハク）」を入れる……ひびきがちがい、この詩では韻をふんでいない。／第三句の「過（カ）」……転句の終わりはふつう韻をふまない。なお、七言では第一句の終わりもふむのが基本だが、五言ではふまないことが多い。

問三 山青くして花然えんと欲す

【根拠】第二句の訓読文「山青クシテ花欲スレ然エント」。

【読み方の型】「山」「青」「花」と読み、レ点のついた「欲」はとばして「然」を読み、一字上の「欲」にもどる。送り仮名「クシテ」「エント」「ス」はひらがなにする。「然」は「燃」と同じ意味で、「も（え）」と読む。「欲」は「〜しようとする・〜しそうだ」の意味の字で、書き下し文では漢字のまま書く。

【よくある間違い】「山青くして花欲す然えんと」……レ点を無視している。／「山青くして花然エント欲ス」……送り仮名をかたかなのまま書いている。

問四 山青花然欲

【根拠】第二句の訓読文「山青クシテ花欲スレ然エント」。

【読み方の型】レ点は、下の一字を先に読んで一字上にもどるしるし。レ点のある字の次の字を先に読む。書き下し文「花然えんと欲す」の字の順と同じになる。

【よくある間違い】「山青花欲然」……白文の順のまま。／「然欲山青花」……レ点は、ついている字とその一字下だけを入れかえる。前の字は上から順に読む。

問五 江＝山　白＝然

【根拠】第一句「江碧鳥逾白」と第二句「山青花欲然」。

【読み方の型】対句は、同じ位置の字どうしを比べる。一字目「江／山」（自然の場所）、二字目「碧／青」（色）、三字目「鳥／花」（生き物）、五字目「白／然」（色。「然」は燃えるような赤）が対応する。

【よくある間違い】「白」に「青」……「青」は二字目で、第一句の「碧」と対応する。位置を一字ずつ数える。

問六　a　ア　　b　ウ　　c　オ

【根拠】a＝第一句「遾（いよいよ）」。b＝第三句「看（みすみす）」（注：見る見るうちに）。c＝第四句「何れの日か」。

【読み方の型】「遾（いよいよ）」は「ますます・いっそう」の意味。「何れの日か……ならん」は「いつになったら……だろうか」と、先の見えないなげきを表す言い方。

【よくある間違い】aに「イ　ようやく」……今の「いよいよ（とうとう）」の意味と取りちがえている。／cに「カ　来年こそは」……「何れの日か」は、いつのことか分からないという意味。来年と決めてはいない。

【全文の訳】川の水は深い青緑色にすみ、鳥の白さがますますきわだつ。山は青々として、花は燃え出しそうに赤い。今年の春も見る見るうちに過ぎていく。いつになったら故郷に帰れる年が来るのだろうか。

問七　ア

【根拠】注「然えん＝燃えるように赤くなろう」。解説の第二段落「山の青と花の赤」。

【読み方の型】漢詩の「～んと欲す」は「今にも～しそうだ」という意味。対句の相手（第一句の「白」）が色を表すので、「然」も色（赤）のたとえと考える。

【よくある間違い】イ……「燃える」を本当の火と読んでいる。ここは色のたとえ。／ウ・エ……前半二句は明るく美しい春の景色（解説）。しおれた花やつぼみではない。

問八　ア

【根拠】解説の第三段落「前半の景色が明るく美しいほど」と第四段落。

【読み方の型】絶句は、前半（起句・承句）が景色＝情景、後半（転句・結句）が心情になることが多い。情景と心情が反対の調子のときは、「対照（ギャップ）」で心情が強まる。

【よくある間違い】イ……景色は暗くならない。明るいまま。／ウ……目の前の景色は旅先のもの。帰る日は分からず（何れの日か）、楽しみに待ってはいない。／エ……色は前半の景色で、後半の気持ちは悲しみ。

問九　（例）故郷に帰れないまま、また一年が過ぎてしまったことを思い知らされるもの。

【根拠】第三句「今春看又過ぐ」・第四句「何れの日か是れ帰年ならん」。解説の第四段落「故郷に帰れないまま一年がまた過ぎたことを、作者に思い知らせるもの」。

【読み方の型】「どのようなものとして」と問われたら、「～もの。」で結ぶ。解説の同じ形の部分（「～ものでもあった」）を手がかりにし、指定の二語を入れてまとめる。（採点：①故郷に帰れないこと、②一年がまた過ぎたこと（を思い知らされる）。二つで正解、一つは部分点）

【よくある間違い】「美しい景色を楽しむもの」……前半の景色だけを見ている。問いは後半の心情。／「故郷に帰れる喜び」……「何れの日か」は、いつ帰れるか分からないというなげき。

問十　一枚の絵

【根拠】解説の第二段落「まるで一枚の絵のように明るくあざやかだ」。

【読み方の型】「何のようだ」と問われたら、たとえ（比喩）の言い方「まるで～のように」「～のような」をさがす。四つの色が向かい合う対句の景色を、絵にたとえている。

【よくある間違い】「春の景色」……たとえではなく、景色そのもの。／「四つの色」……景色の中身で、たとえではない。